公益財団法人　埼玉県剣道連盟『広報誌』

剣風

公益財団法人
埼玉県剣道連盟

事務局　〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
http://www.saitama-kendo.or.jp
（編集責任者　豊島正夫）

第２号　平成24(2012)年６月29日発行　　（題字　野澤　治雄会長）

“剣道を科学する”

日本武道学会会長
東京農工大学理事・副学長
百鬼史訓（なきり ふみのり）

○恩師の言葉　ある時、中学校の恩師が剣道を茶碗に例えて以下のようにお話くださいました。「茶碗の内側からしか見ていたのでは、茶碗全体は分からない！外側から全体的に見なくては駄目だ！そして過去から学び現在を正しく俯瞰（ふかん）すれば未来が展望できる！」と。剣道について考える時、このような視点は極めて重要と考えます。

また、私の母校である東京教育大学の恩師、中野八十二先生（教授・九段範士）から以下のようなご指導と激励を頂きました。「研究や学問は重要だからしっかり頑張りなさい！しかし、剣道の世界は実力主義だから、せっかく好い理論を話したとしても、剣道の実力がなかったら相手は聞く耳を持たないですよ。だからしっかり稽古をして実力を備えなさい！稽古は、なるべく沢山の剣士とお手合わせをしなさい。そうすると、例えばこの構えの人はこのように打ってくるとか、このように防ぐとか、技術や動きに必ず共通性があることが分かる。それを頭の引出しに整理しておくと相手と稽古をする時に役立つよ」と。私にとってかなり鮮烈でインパクトのあるお言葉でした。経験科学という言葉がありますが、まさに長年の稽古の経験から法則性を見出して、ご自分で整理して実践されておられたのです。稽古の中から情報を収集して、分析・パターン化して整理し、それを応用するという、現代で言うところの情報科学的な思考をされていたわけです。尊敬するこのお二人の恩師のお言葉は、今日の私の研究や剣道実践の源となっております。

○剣道を科学する　剣道を科学するということは、剣道の事象を様々な観点から科学の目で客観的に捉えて法則性や再現性があるかどうかを検証しながら因果関係を明らかにし、その結果を現場にフィードバックするように務めることと考えております。剣道についてなるべく客観的に捉えようとする科学的な視点が必要なのです。

私は、自然科学的手法を用いて剣道にアプローチしています。少々、専門的になりますが“バイオメカニクス”と言って、運動生理学、運動解剖学そして運動力学などを総合した研究分野です。例えば、剣道の構えですが、構えは次の動作を効率よく行うために重要なのです。構えは、“動的姿勢”であって単なる“立ち姿”であってはなりません。そのためには、竹刀の持ち方、振り方、構え方、足の踏み方、移動の仕方、打ち方（打突と移動の協調＝上肢と下肢の協調）などをどのようにしたら良いのか、バイオメカニクス的観点から明らかにしようとしています。また東京農工大学に勤務してから今日まで、全日本剣道連盟医・科学委員会委員として剣道用具の安全対策研究に携わって参りました。最近では、剣道による聴力異常の実態とその予防対策研究を行っております。

○日本武道学会　日本武道学会は、1968年に設立され今年で45周年を迎えます。現在の会員数は約800人で、大学教員、高校・中学校教員そして武道愛好家などから構成されています。毎年学会大会が開催され、個人研究の発表だけでなく、最近では、中学校武道必修化や武道の国際化などについてシンポジウムを行っており、その成果は機関誌「武道学研究」に掲載されております。日本武道学会剣道専門分科会のホームページをご覧いただき、是非、ご入会くだされば幸いです。

「大会記録この1年」(2012年前期)全国大会(上位)入賞結果・県予選会結果(報告)

順不同

――全国大会――

○全国高校選抜剣道大会（3・27, 28）
男子　優　勝　　本庄第一高校
女子　準優勝　　埼玉栄高校

――全国・関東予選会――

○高校剣道新人大会（11・25, 26）
男子団体　①本庄第一 ②埼玉栄 ③鷲宮 ③春日部
女子団体　①埼玉栄 ②淑徳与野
③川口総合 ③本庄第一

○全日本都道府県対抗予選会（2・5）
先）田中　次）植竹　五）橋本　中）藤林
三）米屋　副）柴久喜　大）大澤

○全日本女子都道府県対抗予選会（4・1）
先）端　次）鈴木　中）新井　副）栗田　大）堀川

○国民体育大会予選会（5・19）
・男子団体　先）渡邉　次）平野　中）米屋
副）金田　大）齋藤
・女子団体　先）荒井　中）川崎　大）栗田

○全国教職員剣道大会予選会（5・19）
・男子　藤林（秀明中）　淺野（不動岡高）
菊池（上尾高）　三谷（浦和北高）
津坂（大宮東高）
・女子　栗田（越谷西高）
※荒井（蓮田南中－特別枠参加）

○全国高校総合体育大会予選会（個人）（6・2）
・男子個人　①田中（埼玉栄）②田中（本庄第一）
・女子個人　①端（埼玉栄）②福島（本庄第一）

○全日本女子剣道選手権大会（6・3）
①村山（警察）②荒井（久喜）③萩原（越谷）

○全国高校総合体育大会予選会（団体）（6・16, 17）
男子団体　①本庄第一 ②埼玉栄 ③熊谷 ④春日部
女子団体　①埼玉栄 ②淑徳与野 ③本庄第一
④東農大第三

○全国都道府県対抗少年剣道優勝大会予選会（6・16）
①新井（秩父）②吉田（東入間）③臼井（狭山）
③細淵（入間）⑤鈴木（北本）

○全日本居合道大会選考会（4・22）
五段錬成員　①須田 ②藤村 ③奥島 ④戸村
六段錬成員　①永井 ②原口
七段錬成員　①林

――県内大会――

○高齢者剣道大会（6・3）
60歳以上　①島村（羽生）②馬場（大宮）
65歳以上　①伊藤（朝霞）②桑原（狭山）
70歳以上　①片倉（杉戸）②秋谷（羽生）

「栄冠、いまここに」　―全国高校選抜に優勝・準優勝の快挙―

「全国高等学校剣道選抜大会優勝にあたり」

本庄第一高等学校剣道部　男子監督　相川　浩一

去る３月27日～28日に、愛知県春日井市総合体育館で行われた全国高等学校剣道選抜大会に出場し、お蔭様で優勝することができました。埼玉県剣道連盟の皆様をはじめ、高体連、中体連などの諸先生方に深く感謝を申し上げます。

予選リーグは、大分県代表の大分舞鶴高校、徳島県代表の阿南工業に僅差で勝ち決勝トーナメント進出となりました。

決勝トーナメントは、１回戦岐阜県代表の麗澤瑞浪高校に次鋒星野の一本勝ちで１－０、２回戦は大阪府代表のＰＬ学園に３－０、次第にチーム全体が集中力を増し準決勝進出となりました。準決勝では、長崎県代表の島原高校に先鋒でこの日調子が良かった岡部が一本勝ちしてついに決勝進出となりました。

決勝戦は、熊本県代表の九州学院との対戦。伝統も実績も高校剣道界ナンバーワンのチームです。過去の練習試合では、１勝２敗で負け越しています。しかし、選手の表情を見ると、本校の選手はキャプテン田中を中心に皆でリラックスしていました。むしろ、決勝戦前に緊張した表情をしていたのは九州学院だったと思います。結果、準決勝同様に先鋒岡部の一本勝ち１－０で勝利できました。決勝戦での勝因は、「表情の違い」だったかもしれません。ずっと追い求めてきた全国制覇の歓喜と共に感じたのは、勝負の厳しさと、勝負のときの精神状態の重要性を再認識しました。

全国大会には、平成８年剣道場完成と共に入学した男子生徒が、平成10年に愛媛インターハイに初出場できました。それ以来、今回が男女で16回目の全国大会への挑戦で、昨年女子がインターハイ団体三位に入賞し、今回男子が初優勝でき感無量です。

今回の優勝に際して、三つの感謝があります。
まず一つ目は、ライバルに感謝です。ライバルと競り合いながら力がつくからです。埼玉県には沢山の強いライバルがいます。彼らの存在が毎日の稽古に対する姿勢に生きていると思います。ライバルの背中を追い

かける中での優勝でした。

二つ目は、少年男子コーチとして参加した埼玉国体での経験に感謝しています。地元国体に、オール埼玉で望んだ強化事業での経験は指導者として大きな財産になりました。勝つことの苦しさや、難しさ、チームワークの大切さなどを学びました。なにより、国体で少年男子チームの優勝をコーチとして体験でき、感覚的に全国優勝が近づきました。

三つ目は、出会いに感謝です。群馬県出身の私が埼玉県に来て24年になります。剣道連盟や高体連の先生方本当にお世話になり感謝しております。そして何より、今回優勝した選手達だけではなく、本庄第一高校で出会った選手達に感謝しています。伝統的な厳しい稽古や、手抜きを許さない学校生活など、みんな本当に大変だったと思います。卒業生が本校を巣立ち、剣道を続けてくれていることが最も嬉しいことです。

今回は優勝できましたが、まだ道半ばです。引き続き、勝利という目先の目標に向かって真剣に稽古に取り組み、本来の目的である、剣道を通じて様々な事を学べるよう生徒と共に前進して行きたいと思います。今後ともご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

【予選リーグ】

1　本庄第一２(3)－１(1)大分舞鶴（大分県）

2　本庄第一２(3)－１(1)阿南工業（徳島県）

【決勝トーナメント】

１回戦　本庄第一１(1)－０(0)麗澤瑞浪（岐阜県）

２回戦　本庄第一３(3)－０(0)ＰＬ学園（大阪府）

準決勝　本庄第一１(1)－０(0)島原（長崎県）

決勝戦　本庄第一1(1)－０(0)九州学院（熊本県）

【優秀選手賞】泉　和毅

【出場選手】３年　田中和弥、持井亮紀、泉　和毅、岡部敦也、古屋佑樹、金澤拓磨、２年　星野直樹

「選抜大会に準優勝を遂げて」

埼玉栄高等学校女子剣道部　監督　竹田　宏樹

この度、第21回全国高等学校剣道選抜大会に出場し準優勝という結果を残すことができました。これもひとえに埼玉県剣道連盟会長野澤治雄先生をはじめ高体連剣道専門部の諸先生方のご支援のたまものと深く感謝申し上げます。

平成19年の第17回大会において第３位に入賞して以来、ここ数年は、インターハイ・選抜大会共に予選リーグ敗退が続き、全国大会の厳しさを痛感していました。“全国で勝つ”という目標を常に意識して、昨年の玉竜旗大会終了後から新チームになり、数多くの練習試合、大会に参加し準備をしてきました。練習試合では全国の強豪校に幾度となく敗れていましたが、少しずつ選手一人ひとりが自分の欠点や全国という高い意識を持って取り組んできた結果、大敗していたチームにも引き分けや本数勝ちなどと差を縮めていきました。そして、出場する各大会においても優勝や入賞など良い結果が出始めてチームがひとつになり、選抜予選では接線の末に出場権を得ることができました。

迎えた選抜大会では、予選リーグ初戦で三重総合（大分）に１－１同本数で大将戦となり、大将伯耆田が１本勝ちを収めることができ、つづく２試合目の羽咋（石川）にも勝利し予選リーグを突破することができました。２日目の決勝トーナメントでは初戦で系列校の北海道栄、準々決勝は龍谷（佐賀）、準決勝は守谷（茨城）と勝ち進み、決勝戦では中村学園（福岡）と対戦になり４－０で敗退しました。（優秀選手賞・伯耆田 茜）

選抜大会を終えて今思うことは、やはり決勝で敗退し日本一になれなかった悔しさが残ります。しかし、練習試合では一度も勝利したことのない北海道栄、龍谷、守谷高校に勝利したこと、全国大会で準優勝できたことはこれからの夏の大会に向けての良い自信・経験になりました。この結果に驕ることなく、また多くの先生方への感謝の気持ちを忘れることのないように日々の稽古に精進していきたいと思います。

＊　＊　＊

「決勝の舞台に立って」

埼玉栄高等学校女子剣道部主将　伯耆田（ほうきだ）　茜

決勝進出が決まった瞬間、信じられない気持ちと嬉しい気持ちで心が一杯になりました。

中学生時代から全国の決勝の舞台に立ち、日本一になることを目標にしてきた私は、心の底から喜びが湧いてくるのを抑えきれませんでした。今思えば、その浮いた気持ちが決勝戦に今ひとつ集中できなかったかなと反省しています。

今大会を振り返ってみると、いつも７人全員が笑顔でいました。緊張している時もその笑顔で勇気を貰うことができました。これは、新チームになり、半年かけて仲間との信頼関係を築いてできたチームワークだったと実感しています。改めてみんなには感謝の気持ちでいっぱいです。

実技面においては、竹田監督をはじめ、生方先生、保坂先生、蒔田先生の方々に十分な稽古をつけていただき、自分たちを信じて大会に臨むことができました。今回は達成為し得なかった目標に向かって、チーム一丸となって最高の夏にできるように頑張りたいと思います。

私の修行時代 「大阪での修行の日々」

埼玉県剣道連盟　副会長
範士８段　根岸　一雄

「やるからには、とことん頑張る」決意を固めて剣道の一歩を踏み出したのは、今から56年前の高校２年の春（昭和31年）のことでした。当時「剣道即人生」を持論とされた南済先生の薫陶を受け、“昨日の我に今日は勝つべし”の境地で地道に剣道を実践した高校時代でした。卒業後埼玉県警に奉職、２年後に剣道特別訓練員（通称、特練）の指定を受けたことが本格的に剣道人生を歩むきっかけとなりました。

凍てつく冬の寒さの中、炎天下の夏の稽古は勿論の事、剣道具を担いで警視庁・皇宮警察・更には強豪大学等、自ら求めて修練に励んだ結果、関東大会、全国大会、団体選手としての経験を積むことが出来ました。

私の最も印象に残る修行の思い出は、全国レベルの実力の向上を図り、剣道指導者の育成を目的として、大阪府警に「野沢、根岸、町田、青葉、清水」の５名に、長期派遣の特命が下された時のことです。

昭和39年、東京オリンピック開催を控え、まだ東海道新幹線開通前のことでした。東京駅から夜行列車で大阪に向い、不安と緊張のため眠れぬまま早朝大阪に着きました。

翌日から生活環境は一変、重圧を感じながら日々が始まりました。

全国トップレベルを誇る大阪府警は、技術的にも体力的にも格段の差がありました。

同年代では、後に、歴代大阪府警剣道主席師範を勤められた小林三留範士、島野大洋範士、塚本徹男範士等の選手を初め、強者が多数揃い、層の厚さを目の当たりにしました。

当時の府警の練習は、素振り、切り返しに始まり基本技、打ち込み、掛り稽古、指導稽古等、時間と回数の量の多さ、更には試合練習と、毎日中味の濃い高度な内容でした。

私達は歯をくいしばり、大阪の選手の後姿を必死に追いかけるのが精一杯でした。

派遣から数ヶ月後、環境にも慣れた頃、更に夜稽古が加えられました。

１日４回の稽古は、正に体力・気力の限界への挑戦でした。早朝に宿舎本政寺（大阪城築城時代からの歴史あるお寺）を出発、修道館での朝稽古に始まり、府警道場で終日稽古、再び修道館の夜稽古。宿舎に帰る途中足が動かず、僅かな起伏につまづく程の疲労困憊でした。夏までの数か月間で全員が10kg 近くも体重が減り、人が変わったような形相となりながら、極限状態の中で開き直って頑張り抜きました。長い研修も無事に終了し、帰県後休む暇もなく関東剣道大会に臨み、Ｂ組において初優勝。汗と涙と血を流すような苦しい稽古が報われ実を結んだ感激は生涯忘れません。「百錬自得」の実践によって、一本に懸ける執念を学んだ事、特練が一丸となり、厳しい遠征を乗り越えたことがその後の長い修行の土台となりました。

昭和44年特練を引退。関東管区警察学校に剣道助教として勤務。昭和48年警察大学校術科指導者養成科に入校、指導者としての知識技能修得に努めました。更に幾多の試練と向き合いながら、「迷ったら基本に戻れ」を信条として、特練監督、師範という重責を勤めさせて頂きました。

若い頃より自分自身に大きな課題を与え、努力して目標に進む。これを達成した時に次の目標が見えてくる。何事にも耐えて努力する力は多くの師、先輩、仲間の人達により鍛えられたと感謝して止みません。

生涯修行と心得て、伝統文化である剣道を正しく伝承していきたいと思います。

昭和39年秋（1964・9・10）
関東（管区）大会Ｂ組に初優勝を飾る

埼玉の剣道

「渋沢栄一翁と剣道－日本の近代化と共に－」

埼玉大学教育学部教授　剣道部総監督　大保木　輝雄

今年度から中学校体育で武道が必修となったが、武道が文部省の正課として学校体育に編入されたのは、今から100年ほど前のことである。その頃から、武道教育の近代化（普及・研究）に大きな力を発揮したのが、講道館を創始(1882)し、当時、東京高等師範学校校長でもあった嘉納治五郎(1860－1938)と、明治41年(1908)に東京高師剣道部師範（後に教授）となり剣道教育の第一人者となった高野佐三郎(1862－1950)であった。そして彼らの活動を背後で支え続けたのが渋沢栄一(1840－1931)だった。

渋沢栄一は、攘夷運動の志士として活動したが、28歳で渡仏、翌明治元年(1868)帰国後、近代産業の発展に尽し、大実業家となったばかりでなく、理化学研究所・常民文化研究所・学校・養育院の設置などの様々な文化活動にも多大な貢献をしたこともよく知られている。しかし、栄一が武道への見識が高かったことは余り知られていないのではないか。

そのような栄一と嘉納との出会いは古く、明治12(1879)年、日本を訪問した米国のグラント将軍接待のために栄一が主催した武術演武会で嘉納が柔術の形を演じたのが始めである。その後、栄一は、明治34年講道館で講演、同42年に財団法人となった講道館の監事となり、柔道の発展を支え続けた。

一方、剣道では高野佐三郎に期待を寄せた。高野は、明治21年、浦和に明信館を開設し、大正４年には、理想的な剣道修錬道場の建設を企図し、神田今川小路に「修道学院」を開設して新しい育英の道を開いた。また、この年、教育剣道の教科書ともいうべき『剣道』を刊行した。高野の二つの大きな事業に対し、栄一は絶大な支援の手を差し伸べた。

大正３年には『剣道』の刊行を祝して序文を寄せ、自らの撃剣体験を語りながら高野の剣技と普及活動を高く評価し、剣道に対しての所感を綴っている。その「序」には、「想ふに剣法は膽力を尊ぶ故に技術の練習と共に膽力の修養を勉めざるべからず。縱令其技妙に至り神に達するも奪ふべからざるの膽力なきに於ては其妙を發揮する能はざるべし」とあり、「是に於て余は企望す、世の剣法を学ぶ者、宜しく其神に通ずるの技術を修め、之に加ふるに奪ふべからざるの膽力の養成すべし」と結ばれている。「粗より精に進み精より妙に至り妙より神に達す」技術、つまり＜機を見るに敏なる身心技法＞の習得とそれを発揮させる「膽力の修養」の両方が大事だと強調しているのである。

栄一が、そのような剣道への見識を持ちえた背景は何であったのか。

着目すべきは、栄一は文学や儒教の勉学に加え、11歳のときから叔父の道場で撃剣（神道無念流）に親しみ、膽力の養成と共に剣が取りもつ人間関係の涵養を図っていたことである。渋沢家や親戚である尾高家の男子は皆文武両道を修めるのが家風であった。中でも２才年長の従兄、尾高長七郎は22歳で免許皆伝となるような天才的な剣の使い手であり、農閑期には、栄一は家業の藍商もかねて長七郎の後に従い栃木、群馬方面に他流試合に出かけるのが常であったという。また、彼らの師でもある大川平兵衛(1801－1871)に随行することもあり、彼らの精妙で神業に近い剣技を目の当たりにしていたのである。このころの栄一を、孫の渋沢華子はその著書で「胴長短足小太りで、腕力は強く米俵の一俵はかるがると持ち上げるが、剣術は苦手だった」と記している。

パリ留学時の渋沢栄一氏

その後、栄一は志士として24才で江戸に出、漢学塾と北辰一刀流の千葉道場に入門するが、そのねらいは「読書・撃剣などを修行する人の中には、自然とよい人物があるものだから、抜群の人々を撰んでついに己の友達にして、何か事ある時に、その用に充てるために今日から用意して置かなければならぬという考えであった」(『雨夜譚』)という。

そのねらいは的中し、その後、撃剣の取り持つ縁で、一橋慶喜の家来となる。慶喜に認められ、その後の人生を決定的なものにしたのは、「幕府の小栗上野介が農民兵を募集したそれにならい」、一橋家領地備中板倉で歩兵志願者を募り農兵を組織したことであった。当初一人も集まらず、思案の末、栄一は村民の信頼を得るために当地の「読書撃剣の知性人」を求め会談と撃剣試合を実施し大いに時事を語り合って痛飲した。それが「今度来て居るお役人は学問もあり、撃剣も強い」という評判になり、契機となって歩兵志願者が続々と参集。慶喜の絶大なる信頼を受けることになったというのだ。撃剣が、身分制度や貧富の差を超えた人物の資質を評価するものとしても機能することを栄一は体得していたのだ。

28歳となった栄一は、慶喜の弟、徳川昭武に随行しパリ万博に参加。フランスで多くのことを学び、帰国後、撃剣で身につけた旺盛な気力と物おじしない膽力を実業の世界に遺憾なく発揮し、在野の立場で日本の近代化に向けて邁進すると同時に、官尊民卑の悪弊を打破したのである。近代日本建設に資する旺盛な活動を支えた＜機を見抜く感性と膽力＞の根底にあったのが、少年期に慣れ親しんだ剣道の修行であったと考えれば、そこに中学校武道必修化で我々が目指すべき道筋がおのずと見えてくるのではなかろうか。

「武道必修化と本県の現況」

全剣連普及委員会（学校教育部会）主任　埼剣連専務理事　佐藤　義則

1　なぜ、武道が必修となったのか

平成24(2012)年４月から向こう10年間、中学校保健体育科（１・２年）において男女とも完全必修となった。この流れに至った大きな要因は二つあげられる。①教育基本法改正にともない、我が国の「伝統と文化」を重視することが強調され、保健体育「武道」等で具現化する。②今回の学習指導要領改訂により、発達段階を考慮した運動の体系化が図られ、特に中学校期は、「多くの領域の学習を経験する時期」とし、基礎的・基本的な知識・技能をすべての子どもたちに習得させるようになった。

そこで、武道経験の浅い中学校保健体育担当教員が、基本的な技術習得のための研修会や、学校での武道学習をより円滑に実施できるように、地域の指導協力者や団体が協力・支援することが求められる。ついては、武道学習における指導内容の取り扱いや施設・用具の衛生管理・安全管理、さらには適切な指導支援のあり方などを踏まえた上で、保健体育科教員と指導協力者が連携し、より効果的な武道学習の実施が望まれる。

2　中学校保健体育科における武道の実態（教育機関・各団体の調査を参照）

Q１　平成24年度から武道の何を実施する予定ですか

		剣道	柔道	相撲
23年度	全　国	３７．６％	６４．１％	３．４％
	埼玉県	３３．８	７６．６	８．５
	さいたま市	７４．１	６７．２	５．２

Q２　武道に関する調査（平成22年度埼玉県剣道連盟調査）

（１）剣道場　①ある　63%　②ない　37%
（２）剣道具　①40組以上　16%　②39～30組　12%　③29～20組　11%　④19組以下　15%　⑤ない　46%
（３）竹刀の用意　①ある　38%　②ない　62%
（４）木刀の用意　①ある　14%　②ない　86%
（５）年間授業時数　　平均授業時数　10時間扱い

◎必修化に伴う剣道指導者研修会の開催（お知らせ）

本連盟では、平成24年度全面実施された中学校武道必修化に伴い、県内中学校の剣道授業において、効果的な指導が展開されるよう研修会を開催し支援する

（１）日　　時　平成24年10月６日(土)　９：30～15：30
（２）会　　場　埼玉県立武道館　主道場
（３）参加資格　①県内に勤務する中学校教員　②埼玉県剣道連盟会員
（４）定　　員　100名
（５）参 加 費　無料
（６）申し込み　平成24年９月20日(木)締め切り（埼剣連事務局　まで）

スポットニュース

第42回全国中学校剣道大会展望

平成24年４月29日、越谷市立総合体育館で第３回全国選抜越谷錬成会が開催された。本錬成会は、来る８月18日から開催される「第42回全国中学校剣道大会」のプレ大会として県内・全国各地から強豪校が男女各48校出場した。結果は次の通り。なお、埼玉県予選は７月24, 25日に行われる。本県勢の活躍が期待される。

☆錬成大会の結果

	（男子団体）		（女子団体）	
１位	杵築中	（大　分）	国士舘中	（東　京）
２位	北本中	（埼　玉）	東和中	（和歌山）
３位	加賀中	（東　京）	大沼中	（埼　玉）
３位	栄進中	（埼　玉）	住吉第一	（大　阪）

〔付記　競技日程〕

８月18日(土)～８月20日(月)３日間
於　越谷市立総合体育館

○　大会第１日目［８月18日(土)］
　開会式　13：00
　男女個人１～４回戦　14：30～17：00
○　大会第２日目［８月19日(日)］
　女子団体　９：30～12：30
　男子団体　12：30～16：00
　（男女とも決勝トーナメント１回戦まで）
○　大会第３日目［８月20日(月)］
　男女個人　９：00～10：00
　男女団体　10：00～12：00（各決勝まで）

加盟団体紹介（その②）

朝霞剣道連盟　－明日の日本を支える人材育成－

会長：内田　明　　事務局長：伊藤　六夫

1　沿革

朝霞地区における剣道の歴史は、志木市敷島神社境内の石碑によると、明治初期、志木宿に住んでいた彰義隊生き残りの稲田氏が剣道場「養気館」を建て、近郷の青年に剣道を教えていた。高弟川合五郎兵衛（後に朝霞膝折村長）は、朝霞下の原に道場を建て、近在の青年達に剣道を教えた。昭和初期、朝霞の岡駐在所に赴任してきた剣道錬士４段の高橋栄一郎巡査と朝霞の有力者である相沢栄三２段（後に県議）が地元有志と共に道場を建て、「一剣報国会」を結成して普及発展に努めた。昭和11年、旧武徳殿で開催された埼玉県南部銃・剣道大会に出場した一剣報国会は、強豪浦和、大宮、川口を撃破し、大優勝旗を朝霞に持ち帰った。戦後、剣道が復活されて、朝霞警察署敷地内に柔剣道場が出来てから、剣道愛好家により、朝霞にも剣道連盟を作ろうという話が持ち上がった。中心となったのは、前田武雄・小沢武芳・鈴木仁二・佐藤昭一・岡野義一・荒谷良雄・相澤一二郎・渡辺五郎氏等であった。こうして、昭和35年５月、朝霞地区剣道連盟創立総会及び記念剣道大会を開催した。その後、地区内剣道人口の増加に伴い、朝霞から志木市、新座市、和光市と順に分離し、４市それぞれの剣道連盟として発足し、上部機関としての朝霞地区剣道連盟となった。今や、それぞれの管轄下の道場を含めると、13団体が活発な活動を行っている。これまで、昭和41年の埼玉体協主催県大会優勝をはじめ、県大会、関東大会、全国大会で優秀な成績を収める選手や団体が続出している。

2　特色ある行事＆話題

７月に地区大会（個人戦）、11月に朝霞地区体協主催剣道大会（21人団体戦、４市対抗戦）、８月に地区独自に８段の講師を招聘しての講習会、地区合同稽古会を年に５回実施、１級審査会及び講習会を年に３回実施している。

3　今後の抱負

「礼に始まり、礼に終る」剣道の精神は、現代の日本に欠かせないものである。剣道人口をさらに増やし、伝統ある剣道文化を次の世代に伝承していかなければならないと考える。

青少年の健全育成と共に、自らの剣道上達のために切磋琢磨し、皆が力を合せて、地区連盟の発展と向上を願いつつ、決意を新たにしているところである。

小鹿野剣道連盟　＝生涯剣道を目指して＝

会長：井戸川　英進　　事務局長：坂本　旭

1　当連盟の活動地域

小鹿野剣道連盟は、県北西部、群馬県に隣接する小鹿野町が主たる活動の拠点であります。

小鹿野町の地名は、平安時代中期の書物『和名抄』の「巨香郷（こかのごう）」に始まると伝えられ、かつて生糸で栄えた町並みを中心に農山村が広がるのどかな地域ではありますが、先人の培ってきた歴史や文化、伝統を重んずる気風を強く残している地域でもあります。

また、当町の両神薄・小沢口地区は、小説『大菩薩峠』で全国に紹介された「甲源一刀流」発祥の地で、現存する練武道場「耀武館」（県指定史跡）が当時の様子を今に伝えております。また、開祖の教え「剣術は心術なり」を胸に、地元有志による継承活動も行われております。

2　当連盟の歴史

当連盟は、昭和57年６月に埼玉県剣道連盟小鹿野支部として発足したことに端を発します。創設当時は、旧小鹿野町・旧吉田町・旧両神村の２町１村で構成しておりましたが、平成17年の市町村合併を経て、現在は小鹿野町（旧小鹿野町・旧両神村）の１町となっております。

本連盟の中核を成す団体に小鹿野剣友会があり、本会は昭和35年３月に結成された小鹿野町武道振興会（柔道・剣道・弓道）にその由来があります。

現在は、一般会員40名を中心に、小・中学生の指導、剣技の研鑽に努めております。

3　活動状況と今後の目標

当連盟としては各種審査会の実施及びＨＰ開設による情報発信、会員の研修活動等が主な事業であり、この他には加盟団体等主催の大会の後援を行っております。

今年度から町内中学校でも武道の授業が始まり、子ども達が剣道に触れる機会が増えてまいります。今後はこれらを支援するとともに、機会を捉えて「生涯剣道」への手引きができればなお良いと考えております。

少子高齢化が進む中で、若年層会員の確保が難しくなっておりますが、当連盟発足時からの理念である「剣道を通じた青少年の健全育成」を主眼に、当地域における剣道の普及発展に会員一丸となって努めていく所存です。

春日部剣道連盟　－青少年の健全育成を図りつつ－

会長：川鍋　忠和　　事務局長：長谷川裕一

春日部市において、昭和26年に中村梅吉氏（故人豊春村議会議長）をはじめ数名の先生方によって春日部地方剣友会の発足をみたのである。昭和29年合併によってその名を、春日部剣友会と変更し、昭和30年に市体育協会が発足すると同時に協会に加盟して、神社の境内や、学校の教室を借り受けて稽古が続けられた。特に春日部警察署が新設されるに当って演武場の建設には、剣道界・柔道界の人々の大きな協力があって出来上がったものであるが、直ちに一般開放にならず、昭和42年埼玉国体が開催されるに及んでスポーツ振興の意味から演武場を一般開放されることに成り、春日部市の先生方によって春日部剣道会を発足せしめ、春日部地方における剣道の一大発展となったのである。昭和43年には春日部警察署剣道師範となった古賀一二三先生（故人）を会長に迎え、埼玉県剣道連盟に加入し春日部剣道連盟春日部支部を結成する。

現在の春日部剣道連盟団体　各剣友会

一ノ割剣道会（代表 平賀次雄）　大池剣道会（代表 佐藤勝之）　春日部剣道会（代表 片山　剛）
春日部剣真会（代表 河野昭浩）　庄和川辺少年剣道クラブ（代表 笹野晴男）
武里少年剣道（代表 清水三代吉）　豊野剣道会（代表 川鍋忠和）　八木崎剣友会（代表 梶川佳宏）
豊春剣道愛好会（代表 伊藤徳男）　谷中振武会（代表 本田貴志）

以上10団体　小学生・中学生　131名　一般・高校・大学　155名、となります。

さて、近年社会情勢の急速な変化により、青少年の身体活動の低下と合わせて集中力や苦しさに耐える忍耐力の欠如、また本当の意味の感動を未体験、さらに礼儀作法に欠ける点等が問題とされてきました。このような現状を打破して、時代を担う青少年の健全育成を図る必要性から、剣道会の指導者の方々の認識と共通の理解が、努力と情熱に現れ、組織と運営の充実を図り、指導体制の確立、協力、支援体制の強化等により、年々発展の道を歩んで60年が経過し、ここに剣道会によって心身を鍛錬し、力強い体力と、粘り強い精神力等、また正しい礼儀作法や社会性が育成されてきました。その結果、強く・正しく・たくましく成長していく青少年の姿こそ、素晴らしい実績と成果の現れであると思います。

埼玉県居合道部
―居合道は剣道と一体となって発展した剣の道である―

部長：三日尻　幸治　　事務局長：松本　隆夫

1　居合道部のあゆみ

居合道部は、昭和30年「秋水会」が居合道研究会として発足し、昭和43年「埼玉県居合道研究会」となり、昭和45年に埼玉県剣道連盟に加盟した。昭和54年「埼玉県剣道連盟居合道部」と名称を変更し、初代部長に長本　寿が着任した。現在の会員数は、700余名となり全国屈指の居合道部に発展した。

2　居合道とは

居合道は、剣道が刀を抜いて構えた状態から技を行使する立ち会いであるのに対し、鞘に納まっている刀を敵の不意打ちを察知し、一瞬のうちに抜き付ける技である。

全日本剣道連盟は、昭和44年に、居合を学ぶことで刀の操法を知り、手の内を修得し剣道の技に生かせるようにと、「全日本剣道連盟居合（制定居合）」７本を制定した。現在は、全日本剣道連盟居合と称し、正座の部３本、居合膝の部１本、立ち居合の部８本の計12本である。

3　居合道部の活動

活動は、大会の開催、講習会の実施、段位審査会の実施、全国大会選手の選考、研修会の実施等である。大会は、埼玉県居合道大会、昭和46年から第41回になる。埼玉県東西・支部対抗居合道大会、昭和55年から第32回になる。埼玉県五段以下居合道大会、平成12年から第12回になる。講習会は、年４回東西南北の会場で実施している。段位審査会は、年２回初段から五段まで居合道部が主管し実施している。

全国大会での本県の活躍はめざましく、平成６年（第29回埼玉県大会）第３位、平成15年（第38回埼玉県大会）第１位、平成16年（第39回）第２位、平成17年（第40回）第２位、平成23年（第46回）第２位と常に上位進出を果たしている。

4　広報活動

広報については、「居合道だより」を平成元年に創刊号を刊行し、全会員に各地区の理事を通じて配布している。平成24年３月現在で第84号に至る。　（文責：理事長）

あとがき　第２号の編集の開始にあたり、飛び込んで来たのは全国高校剣道選抜大会における本庄第一高校の男子優勝と、埼玉栄高校の女子準優勝のビッグニュースだった。今年度も埼玉の躍進が期待される快挙と言えよう。「埼玉の剣道」に続き本号より「私の修業時代」のシリーズも開始された。玉稿をお寄せいただいた方々への感謝と会員各位のご支援を切にお願いし後記とします。　（広報担当　池田）